愛知淑徳大学論集－文学部篇－　第45号　2020.3　93-105

青少年向けメンタリング運動の生成と IHAD プログラム

Formation of Youth Mentoring Movement and IHAD（I Have A Dream）Program

渡　辺　かよ子
WATANABE Kayoko

1．はじめに

1990年代以降、「不利益を被っている青少年の生活の向上に向けた、アメリカの唯一の最も大々的に語られ、記された、広範な人気を博している社会的介入」[1]とされるメンタリング運動は、その成果の実証と基礎理論の構築によって世界的に拡大するも、様々な課題に直面している。本稿は、貧困対策として（批判と共に）激賞され[2]、世界の青少年向けメンタリング運動を牽引してきた米国のメンタリング運動の生成に決定的な影響を及ぼしたIHAD（I Have A Dream）プログラムの創始と展開、成果、ならびに今後の青少年向けメンタリング運動の拡大に向けた示唆を考察したい。

米国のメンタリング運動は、1980年代末以降、百年以上の活動実績を誇るBBBS（Big Brothers Big Sisters）を中心に拡大し、多種多様な青少年支援プログラムの実践展開と共に今日に至っている。米国のメンタリング運動は、萌芽期（1980年代）、拡大第一期（メンタリング・プログラムと参加者数が急拡大した1988年から1996年）、拡大第二期（全米メンタリング・サミットが開催された1997年から2001年）[3]を経て、2002年から2009年には拡大第三期と称されるべきメンタリング運動の隆盛と過熱の時代を迎えた。この時期には全米メンタリング月間キャンペーンの開始や連邦補助金の拡大等、大統領を初めとする政治家や議会が超党派で大々的にメンタリング運動を推進し、メンタリング・プログラムの参加者は1990年代の6倍の約300万人に達した[4]。

しかしながら連邦補助金によって実施された大規模な学校型メンタリング・プログラムには効果が「殆どない」ことが判明した2009年以降、リーマンショック後の経済的要因も加わり、メンタリング・プログラムへの熱い期待とメンタリング運動の拡大に向けた機運は心ならずも若干の冷却を余儀なくされ、メンタリングの効果の実証と確かなプログラム実践に向けた課題が改めて意識されるようになった[5]。その一方で、2010年代中期以降には、各種青少年向けメンタリング・プログラムの連携の中核として実践と研究を繋ぐMENTOR: National Mentoring Partnershipが、メンタリング運動の大規模な現状調査を行い、メンタリングが青少年によき影響を及ぼしていること、多くの青少年がメンターを必要としていること、メンタリング運動は米国で広範に支持され、メンタリングが世代を超えて還流していることを明らかにした[6]。

メンタリングのネガティブや効果への着目[7]や批判的メンタリングの提唱[8]等、青少年向けメンタリング運動への新たな課題や挑戦が顕在化している今日、本稿では青少年向けメンタリング運動の可能性をその運動が生成した歴史的起点に遡って検討してみたい。ここでは、IHAD（I Have A Dream）プログラムに焦点を当て、1981年に設立され1980年代末の米国のメンタリング運動の生成と急拡大に絶大な影響を与えたとされる同プログラムの創設の経緯と成果、ならびに異文化間のモデル移行の視点からその普遍性の検討を試みたい。

IHAD（I Have A Dream）プログラムについては、米国ならびにニュージーランドで多くのプログラム評価研究[9]が発表され、その成果を生かした実践が各国で重ねられているが、日本では殆ど知られていない。2017年にはIHAD（I Have A Dream）プログラムの創設者ユージン・ラング（Eugene M. Lang）の逝去に際し、多数の新聞雑誌記事がその生涯と偉業を称え[10]、近年、IHAD（I Have A Dream）プログラムは大学進学準備資金の貯蓄モデル事例[11]としても注目されている。本稿はこれらの研究成果や資料に基づき、メンタリング運動の原初的モデルの一つとしてのIHAD（I Have A Dream）プログラムの事例から青少年向けメンタリング運動の今後の在り方と可能を考えてみたい。

２．IHAD（I Have A Dream）プログラムの創始

IHAD（I Have A Dream）プログラムは、今日、米国の28州とワシントンD.C.、ニュージーランドで200以上のプログラムを展開し、16000人以上のDreamersと称される児童生徒に大学進学に向けた長期に渡る個別継続的支援を提供している。同プログラムは、1981年に実業家ユージン・ラング（Eugene Michael Lang, 1919-2017）によってニューヨークでその活動が開始された。ここではまず、創設者ラングの生涯とその設立意図について概説したい。

１）創始者ユージン・ラングの生涯

ユージン・ラングは第一次世界大戦後の1919年、ニューヨークの貧しいユダヤ系移民の両親のもとで生れた。ハンガリー出身の父はブルックリンの海軍工廠の機械操作工であり、ロシア出身の母は公立小学校の教員であった。ラング一家が暮らしたマンハッタンのアパートはトイレが共用で家賃12ドルであり、ラングの幼少期の生活は質素を極めていた。厳しい経済環境ではあったが、両親は子どもたちに教育の大切さを教え、特に自身は初等教育さえ満足に受けていない父親が社会的正義を強調する旧来のヨーロッパの社会主義的理想主義をラングに吹き込んだ。後年、ラングは父親から「形容詞の『人間らしい』という尊厳に値する唯一の人間とは、創造的な人間、地域コミュニティの社会状況に何かを付加する人間である」と教えられたと述べている。幼少期のラングの夢はソーシャルワーカーになることであったが、求職の困難に加えて富の構築によっても社会貢献が可能という校長の助言によってその志は実現しなかった[12]。

大恐慌の時代、15歳で高校を卒業したラングはレストランで時給10セントの皿洗いをしながらニューヨーク市立大学（City College of New York）への入学に備えていた。偶々そのレ

ストランの顧客として訪れたスワースモア大学の卒業生で同大学の理事、クウェーカー教徒の実業家ジョージ・ジャクソン（George Jackson）との出会いがラングの人生を大きく変えた。同氏はラングとその将来に関心を持ち、母校のスワースモア大学について話し、ラングは入学を希望するようになった。入学面接が設定され、ラングは同大学に奨学金付きで入学することになった。当時を振り返り、ラングは次のように述べている。「私はハーバード・クラブに行く（＝面接を受けに行く：筆者）ことになっていたが、（面接に相応しい：筆者）長ズボンを全く持っていなかった。私は天国への入り口となるそのクラブにニッカズボン（＝半ズボン）とセーターで現れた。」[13]

スワースモア大学に入学したラングは、在学中、ペナントの製造販売とクリーニング業（スーツ一着50セント）で生活費を稼いだ。1938年に経済学の学士号を取得して同大学を卒業したラングは、その後コロンビア大学に入学し、1940年にコロンビア大学のビジネススクール（大学院経営管理研究科）で経営学（ビジネス）の修士号（MS）を取得している[14]。

偏平足であったラングは第二次世界大戦に際しても徴兵されず、航空機部品の製造工場で働き、同社の共同経営者となった。1951年にはResources and Facilities Technology Development Corporation（REFAC）を設立した。LCD（液晶ディスプレイ）やATM、クレジットカードの認証システム等に関連する特許を保有する同社はラングに巨万の富をもたらすも、ラング自身は公共交通機関で通勤し半世紀も同じコートを着用し続けるつつましい生活を送っていた[15]。

1963年にユージン・M・ラング財団を設立したラングは、次第に慈善事業（特に教育分野）に没頭するようになり、1997年には全ての経営活動から引退した。1981年に後述のIHAD（I Have A Dream）プログラムが開始され、2001年には高等教育機関による社会的責任と参画型シティズンシップ教育を推進するプロジェクト・ペリクレス（Project Pericles）も設立されている。母校スワースモア大学に多大な寄付を行い、理事長も務めた。総額1億5000万ドル以上の寄付を行い、多数の大学から名誉学位を受け、その社会的貢献は広く顕彰されている。ラングは2017年4月に98歳で亡くなった[16]。

2）IHAD（I Have A Dream）プログラムの開始

ラングによるIHAD（I Have A Dream）プログラムは1981年に開始された。百年以上の伝統を持つBBBS運動に加えて、1980年代後半以後に多数のメンタリング・プログラムが創設されていく背景には、看過できない青少年の生育環境の悪化があった。当時、転居等の地理的移動、貧困地域における失業問題や生育に適した社会機関の不足、両親の共働き、一人親家庭の増加を背景に、多くの青少年が大人の支援をうけることなく成長を余儀なくされ、絶望的な孤独感に苛まれていた[17]。豊かで教育のある人々が社会的成功へのチャンスを掴む一方、貧しく教育のない者にはその機会はなく、男女の報酬格差の縮減と同時に女子の経済的地位の二極化が進行する中、一人親家庭の割合は1970年代から1980年代に倍増し、親以外の世帯主と住む子どもの割合は1980年にほぼ一割となっていた。高齢者の福祉の充実と貧困率の低下とは対照的に、子どもの貧困率は上昇に転じ、1980年代には20%に達していた[18]。

ラングのニューヨークでのIHAD（I Have A Dream）プログラムの開始決定は突然であった。1981年6月、著名な実業家となっていたラングは、卒業から50年後に母校のニューヨーク市イースト・ハーレムの公立小学校（Public School）121の卒業式に来賓として招待され、祝辞を述べることになった。ラングは当初、成功に向けた努力や勤勉の重要性を説くありきたりの祝辞を述べることを考えていた。しかしながら、演台に向う途中の同校校長との何気ない語らいで、当日晴れがましく小学校を卒業する生徒の4分の3は高校を卒業することなく社会人となるであろうことを聞いた。あまりに低い高校卒業率に驚いたラングは、即座に祝辞の内容を変更した。ラングは自身がワシントン大行進でキング牧師の「I Have A Dream」（私には夢がある）の演説を聞いた時のことを話し、61人の卒業生に「全ての人間は夢をもつべきである」と述べ、卒業生全員に、高校を卒業し4年制大学に入学が許可されれば授業料を賄うための奨学金（一人毎年500ドル、4年間で計2000ドル）を用意することを約束した[19]。

ラングは、自身が「Dreamers」と称した生徒たちがカレッジ進学を現実のものと感じるようにするためには奨学金だけでは不十分と考え、奨学金以外の継続的支援を提供することにした。生徒が集まる場所を確保すると共に、近所の社会福祉組織の若いケースワーカーであったジョニー・リベラ（Johnny Rivera：23歳）を雇い、生徒とその家族のために必要な支援サービスの調整を行なった。ラングとリベラはメンターあるいはやる気を引き出す人（モーティベイター）としてDreamersと緊密に交流した。リベラは日々のプログラムの活動状況を管理し、Dreamersに学校での出来事や様子を尋ね、気遣い、時には家庭訪問をして生徒について保護者と話した。Dreamersは土曜日には、しばしば数学の問題や家庭や友達の問題を話しにラングの会社を訪れた[20]。

卒業式での祝辞から5年目の1985年には生徒は第11学年となり、ラングの会社を訪ねてはラングと大学適性試験の準備やどの大学に出願するかの相談をした。もともとの当該卒業生61人のうちニューヨーク在住の52人は全員退学することなく高校に在学していた。このことは当該地域が黒人やヒスパニック系の人々が暮らす貧しい居住地であるという地域事情を勘案すると驚くべき出来事であった。同地域では高校退学や薬物使用が日常茶飯事となっており、大学進学は親の経済力を超えた贅沢と見なされていた[21]。

上記は1985年10月にニューヨークタイムズ紙の第一面[22]で紹介され、広くメディアで注目された。小学校卒業から高校卒業までの長期にわたる個別継続的支援と奨学金の約束が驚異的成果をもたらしつつあった。1986年には、IHAD（I Have A Dream）プログラムに関する多くの問合せに対応するため、新しい世代の創始に向けて、IHAD（I Have A Dream）財団が組織された[23]。

3）初年度生の驚異的成果への賞賛とプログラムの拡大

1991年にはニューヨーク在住の当初の卒業生の80％以上が高校を卒業ないしはそれと同等の資格を得ていることが判明した。当時の当該地域の落第率が60～75％であったのと比較して瞠目に値する成果であった。当該小学校の学業成績はニューヨーク市の619の小学校のうち

611位であり、卒業生で大学に進学する者は学年に一人か二人であったという。小学校の卒業式から10年後の1991年にはラングのDreamersのうち50％以上の33人が大学に進学していた。IHAD（I Have A Dream）プログラムの成果はメディアによってさらに広く全米に伝えられ、ミルウォーキーのOne-on-Oneやボルチモアの Project RAISE等、各地でそれをモデルとする実践が急速に拡大した。ラングによる普及に向けた努力と共に、1991年には米国の26州の43都市で150のプログラムが設立され、1万人以上の児童生徒が参加するようになっていた[24]。

1993年には米国の1980年代の青少年向けメンタリング運動の興隆に関するフリードマンの名著『The Kindness of Strangers: Adult Mentors, Urban Youth, and the New Voluntarism』（見知らぬ人の親切：大人のメンターと都市の青少年、新しいボランティア精神）が、IHAD（I Have A Dream）プログラムは、二つの意味でメンタリング運動の拡大に重大な役割を果したと述べている。一つは青少年の支援に必要な継続的な気遣いや世話の重要性、もう一つが「夢の民主化」である。

第一は、貧富の差が広がる1980年代において、貧しい青少年のために奨学金に加えて個別継続的支援が決定的に重要であることを示したことである。「冨と富豪を称賛した1980年代のただ中で何人かの百万長者が社会的行動の英雄の役割を演じるキャスト（出演者）となるべきであったということは驚くべきことではない。しかしながら、ラングは個人的責任を引き受けることの奨励と貧しい青少年の支援の見通しを劇的に表現することに社会的注目を利用したのみならず、彼のプロジェクトの成功の決定的要素は青少年にメンターのような役割をはたして個人的に関与することにあることを強調したことにあった。実際、彼は今日、IHAD（I Have A Dream）の最も著名な奨学金の提供はプログラムの「名残りの、退化した」（vestigial）部分にすぎないと述べている。その実際的な重要性は青少年の人生に関心をもつ一団の大人達を提供することを通じて、集中的気遣いと同様、6年以上の長期にわたる気遣いの継続性の強調にあった。」[25]

ラングのIHAD（I Have A Dream）は、さらに「夢の民主化」という点でも1980年代のメンタリング運動の興隆に決定的に重要な影響を及ぼした。一体、大富豪の何人がラングのような貢献をしてくれるのか、こうした特別な支援を得られない不運な児童生徒はどうしたらいいのか、富豪ではない普通の市民はどのようにして貢献が可能なのか。こうした問題に多くの組織や企業、地方自治体が「夢の民主化」（democratizing the Dream）、すなわち、学級や学校全員の世話をするほどの資産的余裕はないものの、一人の青少年を担当し支援することなら可能でありそうした活動を行いたいという個人の集団がメンタリング・プログラムを創始することによって上記の課題に応答した。IHAD（I Have A Dream）はそうしたメンタリング・プログラムのモデルとして絶大な影響力をもち、その様式が各地でそれぞれの地域環境に応じて複製されていった[26]。

３．IHAD（I Have A Dream）プログラムの概要

１）IHAD（I Have A Dream）財団について

IHAD（I Have A Dream）は貧困地域の青少年にその成績や才能に関わらず長期の個別的継続支援と奨学金を提供することによって教育やキャリアの目標に到達すること、すなわち夢の実現の支援を目指している。その創設当初からの特徴は、支援が優秀児や問題児といった特別な児童生徒のみでなく、当該小学校の学年の全ての児童生徒を対象に小学校時代から高等教育段階まで一貫して同一集団の児童生徒に実施されていることである。

今日、IHAD（I Have A Dream）財団はそのホームページにおいて自身の業務と使命、未来図について以下のように描写している。「IHAD（I Have A Dream）財団はすべての子どもが高等教育機関に進学し、その潜在能力を実現し、その夢を確実に実現できるよう活動している。我々は恵まれない地域コミュニティの子ども（Dreamers）にその経済的障壁を取り除くために授業料の支援を行うと共に、中等後教育機関に合格しよい成績を修められるためのスキルや知識を身に着けることで大学を卒業できる力をつけている。Dreamers の大学入学を支援することで我々は彼等を異なるアカデミックな生活の軌跡に乗せ、そのことが生徒の家族やそれに連なる世代により広範なインパクトを及ぼしている。／IHAD（I Have A Dream）は Dreamers と十年間、放課後、週末、夏休み期間中に Dreamers 本人やその家族との長期の関係性を発展させながら活動する。我々は Dreamers に学業と社会的情緒的支援を提供し、自信とその最も野心的な夢を追求するために必要な生活スキルを身に着けさせる。」[27]

「IHAD（I Have A Dream）財団の使命は、小学校（時代）から大学（時代）にわたる学業や社会的情緒的支援を提供することによって、恵まれない地域コミュニティの子どもたちが学校や大学、キャリアにおいて成功する力をつけることにある。」「我々の夢は全ての子どもがその生来の潜在能力を燃え上がらせる平等な教育的キャリア的機会にアクセスできる世界である。」[28]

同財団は特に以下の個別支援に留意している。学業、サポート・ネットワーク、社会的情緒的生活スキル、金銭的基礎知識と資源、キャリア準備、心身の健康、市民的関与、に関連する個別継続的支援である[29]。

IHAD（I Have A Dream）プログラムには各地の地域コミュニティや Dreamers の必要に応じた多彩な実践がなされているが、以下の八つの中核的要素が共有されている。①長期間の支援：持続的支援が遅くとも第３学年に開始され大学卒業まで継続されなければならない。②個別の支援：成果を意識した学年段階に適応したサービスやプログラミングが提供されている。③地域社会への焦点化：地域でのサービス・ラーニングの機会が提供されている。④必要への対応：特に貧困地域に暮らす青少年の必要に対応している。⑤包括性：能力や成績にかかわりなく、一つの学級あるいは学年、学校の全ての生徒を支援対象としている。⑥メンターシップ：生徒は支援を提供する一人の大人との持続的関係性を築く。⑦家族の関与：言語の障壁にかかわらず家族との関係性に留意している。⑧授業料の保障：参加青少年が大学に進学した場合、授業料支援のための奨学金が用意されている[30]。

2）プログラム運営上の原理的要素

上記の中核的要素は、プログラムの実際的運営においてどのように実現されているのか。以下は 2006 年に連邦司法省補助金報告書に描写された六つの原理的要素である。

第一はスポンサーとその役割である。スポンサーはプログラムに財源と概要、方向性を示す。デザインについて、スポンサーは「Dreamers」と称されるプログラムに参加する青少年にメンタリングを提供することが期待されている。実際にはスポンサーが積極的な役割をはたす場合もあるが、ある場合にはその代替者を雇用している場合もある。さらには Dreamers と殆ど接触を持たないプログラムもある。

第二はプロジェクト・コーディネーターとその役割である。有給で専任のプロジェクト・コーディネーターがプログラムの活動とメンター等の参加者に関する業務の調整にあたる。プロジェクト・コーディネーターが IHAD（I Have A Dream）プログラムの中核となっている。スポンサーやボランティアによる支援がある場合もあるが、プロジェクト・コーディネーターが中心的貢献者となっていることには変わりはない。

第三はプログラムが提供するサービスの主な受給者は「Dreamers」と称される青少年である。IHAD（I Have A Dream）プログラムは Dreamers の家族へのサービスの提供を行い、あるいは少なくとも家族に支援的活動に関与するよう要請しているが、多くの家族（親、保護者、兄弟姉妹）は IHAD（I Have A Dream）プログラムに積極的に関与していないのが現状であるという。IHAD（I Have A Dream）プログラムは、Dreamers の成長成熟につれて変化する必要に合わせて進化しながら、教育的活動やメンタリング、カウンセリング、求職、文化的・地域的・娯楽活動を提供している。

第四は地域コミュニティである。地域コミュニティは支援、会合場所、娯楽空間、資源、ボランティアと専門的知識を提供することで法外な費用をかけることなく広範なサービスの供与を可能にしている。特にプロジェクト・コーディネーターの執務空間とプログラムの諸活動を行う場所を提供してくれる学校と集合住宅プロジェクトが重要な役割を果たしている。

第五は資源であり、資源はスポンサーの財政的関与によるものである。スポンサーの関与はプログラムによって異なり、無制限の財源を持つプログラムもあれば明確な上限が設定されているプログラムもある。通常、スポンサーはまず 30 万ドルを寄付することが期待され、以後、追加で 15 万ドルを供与するということが一般的であるが、実際には 45 万ドル以上となることが多いという。

第六はプログラムが保障している奨学金であり、高校卒業後、コミュニティカレッジや州立大学、認定テクニカルスクール等の授業料の幾分かを提供している[31]。

4．IHAD（I Have A Dream）プログラムの成果

2001 年には IHAD（I Have A Dream）プロジェクトの 8 つの地域プログラムのプログラム評価の総括をニューヨークの Arete Corporation が発表している[32]。プログラム評価における

測定可能な効果としては、高校卒業率、大学在学、学業成績（成績とテストの得点）、学校への出席状況が取り上げられ、態度的行動的変化としては妊娠率、教育達成動機、同輩集団と同輩集団圧力、レジリエンス、非行、プログラムへの参加態度、コストと便益が示されている。以下の＜表１＞はその一覧であり、目覚ましい成果が明らかとなっている。

＜表１＞　IHAD（I Have A Dream）プログラムのインパクト

測定可能な効果	高校卒業率	調査を実施した６調査全てにおいて、「Dreamers」の高校卒業率は統制群あるいは地域の基準卒業率と比べて統計的に有意に高く、そのうち２調査で２倍以上となっていることが判明。 ・1981年（初年度）のニューヨークのPS121校の生徒61人の高校卒業ないしはGED資格取得者率は90%（それまでの同校実績は25%）となった。 ・1993/94年のシカゴでは69%（同地域全体では40%）、96年にはさらに75%に上昇し統制群の２倍以上の卒業率となった。 ・オレゴン州ポートランドでは、1998年の「Dreamers」の予想高校卒業率は統制群より10～15%高く、二人の「Dreamers」は飛び級をして１年早く卒業している。 ・ニュージャージ州パターソンの「Dreamers」は前年の同校の生徒よりも高い卒業率となっている。
	カレッジ進学率	高等教育機関ないしはその他の中等後教育機関の進学者数を調べた四つの調査研究全てにおいて非常に高率となっている。 ・ニューヨーク市のPS121小学校の初年度生の半数が中等後教育機関に進学した。 ・1996年のシカゴのプログラムでは統制群の約３倍の進学率となった。 ・ポートランドの活動を継続している「Dreamers」の約半数がスケジュールどおりに高校を卒業し、１年以内に大学に進学することが見込まれている。
	学業成績／成績とテスト得点	３調査で「Dreamers」が成績ないしはテスト得点で有意な向上を示していることが判明した。 ・ポートランドの「Dreamers」ではGPAがＣ＋以上の割合が他の二つの比較グループを上回った。 ・ポートランドの「Dreamers」はポートランド学力水準テストにおいても成績が向上した。第８学年末までに64%の「Dreamers」が州読解試験に合格した（統制群より10～13%高い）。数学では「Dreamers」の合格率は統制群の２倍となった。 ・ニューヨークのプロジェクトが「Dreamers」の個人指導計画を展開した結果、数学の得点が向上した。 ・ヒューストンでもIHAD（I Have A Dream）への参加が学業成績によき効果をもたらしていることが判明し、特に「Dream Partner」と称されるメンターとの関係性を発展させた「Dreamers」で高い効果が見られた。
	出席率	IHAD（I Have A Dream）は出席率にもよい効果をもたらしている。 ・ポートランドの「Dreamers」の80%が少なくとも85%の出席率であったが、統制群では63～70%であった。 ・ヒューストンの調査では落第すると思われてきた「Dreamers」が成績は芳しくないものの在学を継続している。
態度的行動的変化	妊娠率	IHAD（I Have A Dream）は妊娠率の低減にもすばらしい成果を上げている。 ・妊娠率についてポートランドのプログラムにおいて妊娠率そのものは減少しなかったが、子どものいる「Dreamers」の73%が留年することなく高校を卒業することが見込まれ（全国平均は30%）ている。また３人は飛び級で早期に卒業し、２人は既にコミュニティ・カレッジに在学している。こうした結果がもたらす当該母親の総合生涯所得の増加額は94万３千ドルと見積もられ、その額は大よそIHAD（I Have A Dream）プロジェクトの費用総額に相当するものとなっている。
	教育達成動機	実質的に全プロジェクトにおいて質量共に「Dreamers」のアスピレーションは高く、学校や人生、未来についてより積極的であることが示されている。 ・ポートランドでは学業成績が大切と思う「Dreamers」は92%、将来への希望を持つ「Dreamers」が89%、高校卒業予定の「Dreamers」は95%、カレッジ進学希望の「Dreamers」は95%となっている。 ・Public/Private VentureによるワシントンD.C.のプロジェクトに関する調査でも、IHAD（I Have A Dream）が生徒のアスピレーションと教育に対する態度によき効果をもたらしていることを明らかにしている。 ・通常の活動以外にDream Partner（メンター）と過ごしたヒューストンの「Dreamers」は、そうした交流を行わなかった者よりもより現実的なキャリア目標を示していた。

態度的行動的変化	同輩集団と同輩集団圧力	三つの調査研究が同輩との十代の青少年の重要な眺望を提示している。全ての調査において「Dreamers」はよからぬ同輩圧力によりよく抵抗することができ、相互に支援し合い、役割モデルとなっていることが明らかとなった。 ・ヒューストンにおいては、「Dreamers」が同プログラムに参加して Dream Partner（メンター）と交流する期間が長くなるほど、同輩圧力によりよく抵抗することができている。 ・シカゴの生徒は友人の「Dreamers」との友情の大切さを強調しており、調査研究は「ピアとの交流が成功を支える規範を作り出した」としている。 ・パサディナでは独立した研究者が、全ての家族が観察しているプログラムの活動経験に基づいて兄弟姉妹が自身の生涯の選択を再考するという「Dreamers」の家族への波及効果を認めている。
	レジリエンス	二つの調査（ヒューストンとシカゴ）は IHAD（I Have A Dream）が生徒の間の「驚異的」な数のトラウマを生み出している生活上の出来事の影響の緩衝となって和らげ、学力向上や長期的な幸福を維持ないしは増進していることを示している。
	非行	ポートランドの研究では男性の「Dreamers」が少年裁判所に送られる頻度が劇的に低下していることが判明した。送致される人数は統制群と同程度であったが、個人別頻度は低下していた。男性の「Dreamers」が送致される割合は統制群のわずか 57 ～ 58％であった。
	プログラム参加	シカゴの学生は最初は懐疑的であったが、92％がプログラムの活動に参加し、少なくとも 90％が卒業後もプロジェクト・コーディネーターとの関係性を継続した。同研究は生徒のスタッフとの関係性は、少なくとも、個人指導や個人的問題解決の援助が求められる決定における必要と同様の重要な要因になっていることを見出している。
	コストと便益	ポートランドでの研究は「Dreamers」の生活向上状況の社会へのコストと便益について検討し、もしそうでなければ高校を卒業しなかったかもしれない 8 人の「Dreamers」が高校を卒業するだけで、彼らの所得の増加という経済便益は同プロジェクトに要する 100 万ドルの費用コストに相当するか上回ると試算している。 ・11 人の十代の母親の生涯所得の増加試算額だけで、プロジェクトの費用コストの 94％以上になる。 ・男性「Dreamers」の非行の低減によってポートランドは 6 年間でおよそ 37 万 4000 ドルを節約している。 ・他の「Dreamers」の想定される高い卒業率を加えなくとも、社会への総合的経済便益は同プログラムの費用コストの 131.7％となることが試算される。

出典：Arete Corporation, *"I HAVE A DREAM"* : The Impact, 2001.

以上のような成果を上げている IHAD（I Have A Dream）プログラムについて、ラング自身はそうした数値を特に気に留めていなかった。ラングによれば、10 年間 Dreamers を支援するには 45 万ドルを要するが、その額は社会が同じ期間（＝ 10 年間）に投獄収監するのに要する費用よりも遥かに少ないという。「Dreamers の 90％は高校を卒業し、60％は高等教育機関に進学しているが、私は Dreamers を統計数値としては見ていない。彼等のうちの全員が成功したわけではないし、成功した Dreamers は大学などには進学せず、確固とした自身の能力が発揮できる仕事に就いているかもしれない。」[33]

5．ニュージーランドにおける IHAD（I Have A Dream）プログラム

米国各地で目覚ましい成果をあげてきた IHAD（I Have A Dream）プログラムは、2003 年にはニュージーランドにおいて設立され、ニュージーランドの青少年向けメンタリング運動の重要な構成要素の一つとなっている。深刻な青少年問題に悩むニュージランドでは、米国でメンタリング運動が拡大していた 1990 年代末には「メンター」や「メンタリング」という言葉がよく聞かれるようになり、各地で青少年向けメンタリング・プログラムが開設されると共にそれらの連携組織も結成されていた[34]。

IHAD（I Have A Dream）プログラムのニュージーランドにおける実践は、2003年に資産家のギルモア夫妻（Scott and Mary Gilmour）によってオークランドで開始された。1980年代から90年代に米国オレゴン州ポートランドに15年間在住し、IHAD（I Have A Dream）プログラムを見聞きしていた夫妻は帰国後、オークランドでI Have a Dream財団（Charitable Trust）を設立し、2003年にMt Roskillの貧困地域（Decile 1）のWesley小学校の4年生を対象にプログラムを開始した。同プログラムの卒業生の80％が高等教育に進学し、その数値はプログラムの支援がなかった同地域の前学年の進学率が30％であったことと比較すると、IHAD（I Have A Dream）プログラムは米国同様、驚異的な成果を上げていた[35]。

創設準備の段階からプロジェクト・コーディネーターとしてニュージーランドのIHAD（I Have A Dream）プログラムの管理運営の中核を担っているのが、25年間の青少年指導の経験を持つAnt Backhouseである。2016年以来、IHAD（I Have A Dream）プログラムは同氏を中心にスタッフ20人がWhangarei地域（住民の85％がマオリ）の750人の「Dreamers」の支援を展開し、その活動規模を拡大している。2012年の創立10年目には、新たな評価レポートが出され、米国文化を越えるプログラムの有効性が確認されている[36]。

６．おわりに

以上、1981年にユージン・ラングによって創始されたIHAD（I Have A Dream）プログラムの展開と成果について検討してきた。貧困地域に住む青少年にその成績や才能に関わらず長期の個別的継続支援と奨学金を提供することによってキャリア達成という夢の実現を目指すIHAD（I Have A Dream）プログラムは、その対象を優秀児や問題児といった特別な子どもに限定することなく、当該小学校の学級ないしは学年の全ての子どもに小学校時代から高等教育段階まで一貫して同一集団の子どもを個別継続的に支援している。そこでは今日の通常のメンタリング・プログラムの事務局体制によるメンターとメンティの関係性の支援という基本構造は存在するものの、個人の必要に応じたよりファジーで多層的な支援活動が組み込まれていることが明らかとなった。

IHAD（I Have A Dream）プログラムは、確かに各地で驚異的な成果を上げて来た。しかしながらそうした進学率等の数値としての「成功」についてパトロンであったラング自身は無関心であり、プログラムの成果をあくまでも子どものよりよい生涯の視点からその本質を柔軟に捉え、社会と個の成長の在り方に包括的にアプローチしていた。こうしたラングの姿勢は、今日の補助金政策における成果の実証の強要とは対極にあるといえ、数値や成果に囚われないパトロンの姿勢がよき成果を生み出しているように思われる。IHAD（I Have A Dream）プログラムの創始は1980年代のメンタリング運動の生成に決定的影響を及ぼしたが、同プログラムが学ばれ、模倣され、複製され、改訂されていく中で、こうした本来的な成果に対する大らかさが失われていった観が否めない。今日、数値をこえるより本質的なプログラム自体の善さを目指す大らかさや柔軟性の再確認が必要な時期に至っているのかもしれない。

メンタリング運動の生成にあっては、あくまでも現実的必要に対応するために活動が開始され、工夫が重ねられていく中で運動そのものが成熟してきた。IHAD（I Have A Dream）プログラムそのものは大きな成果を上げているが、そのプログラムに参加できるかどうかは一部の地域や学校に限定され、偶発性を伴うものとなっている。メンタリングは青少年によって必要とされ、メンタリング運動そのものの拡大が必要なことは議論の余地はない。今日のメンタリング運動の原初的モデルとなったIHAD（I Have A Dream）プログラムは、改めてメンタリングにおける青少年中心主義の遵守の意義とその実現のための柔軟性と工夫、特にごく普通の市民がそれぞれの専門性や事情に応じて関与できる「夢の民主化」に必要なさらなる工夫の重要性を示唆している。

---

[1] Walker, G., Mentoring Policy and Politics, *P/PV Brief*, October 2007

[2] 例えば、「貧者の大学進学率を上げるこれまで試みられた最も有効なプログラムの一つ」としてIHAD（I Have A Dream）が激賞されている。Levine, A., *Beating the Odds: How the Poor Get to College*, Jossey-Bass, 1996, p.178. 等。

[3] 拙稿「米国におけるメンタリング運動の展開」『言語文化』（愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会紀要）第11号2003年。同「『全米メンタリング月間』キャンペーンに関する考察」『愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇』第38号2013年。等を参照。

[4] 拙稿「米国連邦政策におけるメンタリング・プログラムと学校教育制度」『愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇』第35号2010年。

[5] Wheeler, M. et al., Review of Three Recent Randomized Trials of School-based Mentoring: Making Sense of Mixed Findings, *Social Policy Report*, 24-3, 2010. 拙稿「米国連邦政策と青少年向けメンタリング・プログラムの効果」『日本生涯教育学会論集』36、2015年。

[6] 拙稿「米国の青少年向けメンタリング運動の動向：MENTORによる三つの報告書（2014～2018）の検討から」『愛知淑徳大学論集―文学部篇―』第44号2019年。

[7] 拙稿「メンタリングが及ぼすネガティブな効果に関する考察」（国立教育政策研究所社会教育実践研究センター）、『日本生涯教育学会第40回大会発表要旨集録』2019年36頁。

[8] 拙稿「Critical Mentoringに関する考察」（早稲田大学）、『日本社会教育学会第66回研究大会プログラム要旨集』2019年45頁。

[9] 例えば、Coons, C. and Petrick, E., A Decade of Making Dreams into Reality: Lessons from the I Have A Dream Program, *Yale Law & Policy Review*, 10-6, 1992. Byrne, P., The Educational Effectiveness of the Albany I Have a Dream Program, A Dissertation submitted to the University at Albany, State University of New York, School of Education, Department of Educational Psychology and Methodology, 2001. Diamantis, O., An Exploration of the 'I Have a Dream' Program and its Impact on Urban Students'

Academic Trajectories, A Dissertation Submitted to the Faculty of the Graduate School of Applied and Professional Psychology of Rutgers, The State University of New Jersey, 2012.

[10] Eugene Lang, Investor Who made College Dreams a Reality, Dies at 98, *The New York Times*, April 8, 2017. Hagerty, J., Eugene Lang Found Giving Money Wasn't Enough: New York Entrepreneur Mentored Harlem Children, Steering Them Toward College, *The Wall Street Journal*, April 14, 2017. Langer, E., Eugene Lang, Millionaire Who Financed College Dreams, Dies at 98, *The Washington Post*, April 11, 2017. Smith, V., In Honor of Eugene Lang '38, *Swarthmore*, April 8, 2017.

[11] Rist, C. et al., The Power of Connecting Children's Savings Accounts and College Access-Success Programs, *Prosperity Now*, October 2019.

[12] Hagerty, op. cit. Langer, op. cit. Smith, op. cit.

[13] Ibid.

[14] Ibid.

[15] Ibid.

[16] Ibid.

[17] Sipe, C. L., *Mentoring: A Synthesis of P/PV's Research: 1988-1995*, Public/Private Ventures, 1996, pp. 1-3.

[18] Phillips, K., *The Politics of Rich and Poor*, Random House, 1990.

[19] Buckley, M. & Zimmermann, S., *Mentoring Children and Adolescents: A Guide to the Issues*, Praeger, 2003, p. 68. Geist, W., About New York; One Man's Gift: College for 52 in Harlem, *The New York Times*, Oct. 19, 1985.

[20] Ibid.

[21] Ibid. 同地域を離れた９人のうち２人はラングとの交流が継続し、奨学金を利用する予定であった。

[22] Geist, op.cit.

[23] Our History（https://www.ihaveadreamfoundation.org）

[24] Coons and Petrick, op. cit., pp. 82-83.

[25] Freedman, M., *The Kindness of Strangers: Adult Mentors, Urban Youth, and New Voluntarism*, Cambridge University Press, 1993, pp. 52-53.

[26] Ibid., p. 53.

[27] Our Work（https://www.ihaveadreamfoundation.org）

[28] Ibid.

[29] Ibid.

[30] Ibid.

[31] Rhodes, W., et al., *A National Evaluation of the "I Have a Dream" Program*, Abt Association

Inc., 2005, 3-4.

[32] Arete Corporation, *"I HAVE A DREAM"* : The Impact, 2001. 同報告書は以下の 8 地域でのプログラム評価に基いている。Aron, L. & Barnow, B., Evaluation of New York City's Class of 1992 "I Have a Dream" ® Program", May 1994. Arrasmith, D. et al., "I Have a Dream" Report, Portland, OR., 1998. Baily, K. & Kahne, J., "The Role of Social Capital in Youth Development: The Case of "I Have a Dream," Chicago, IL., 1997. Branch, A. et al., I Have a Dream in Washington, D. C. Interim Report, Philadelphia, PA, 1991. Haggard S. & Manke, B., I Have a Dream Houston Program Evaluation 1999-2000, Houston, TX. Hayman, J. & McGrath R., The Paterson, New Jersey, I Have a Dream Program: Academic Performance and Outcomes, Teaneck, NJ. Kahne, J., Personalized Philanthropy: Limits, Challenges, and Possibilities, Chicago, IL. 1998. Sims, M. Shoemaker, M., Delivering on a Promise: An Evaluation of the I Have a Dream Foundation Pasadena, California, 1997.

[33] Bowler, M., Lang Puts Money Where Dream is; Funding: Eugene M. Land's 'I Have a Dream' Scholarship Program Has Been Replicated in 64 Cities, Including Baltimore, *The Sun*, Nov. 12, 1997,

[34] 拙稿「ニュージーランドの青少年支援に向けたメンタリング運動に関する考察」『愛知淑徳大学論集－文学部・文学研究科篇』第 39 号 2014 年 55 頁。

[35] I Have A Dream（http://ihaveadream.org.nz/）

[36] Hill, J., 'I Have A Dream' : A Report for the IHAD Charitable Trust: An Evaluation of the Outcomes for Students, 2012.

（本研究は JSPS 科研費 18K02294 の成果の一部である）